

県研究主題

具体的な活動や体験を通じた気づきの質を高める学習活動を充実し、生活科学習の特質を生かした学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 内田 なぎさ（県央地区）

<研究主題>

子どもの「思い・願い」を引き出す授業づくり  
— 気づきの質を高める授業の工夫・改善 —

1 提案内容

教員が工夫しながら、1年間継続的に繰り返し同じ公園に通って、季節の変化を感じたり季節の物で遊んだりすることを通して、身近な自然への興味関心が高まり、次の活動への思い・願いが生まれると考えた。その、自分の思い・願いをもって、具体的な体験を積み重ねる中で、さらに友達との交流を通して気づきの質が高まるのではないかと。

(1) 研究内容 具体的な手立て

研究テーマに迫るために次に述べる2点に重点を置いて、研究を進めた。

① 繰り返し活動する時間の保証

ア 体験活動の充実

年間を通して繰り返し関わる一人一本の木を決める。無自覚の気づきを意識化させたい。

イ 年間計画

1つの公園を年間計画の中心に置き、訪れる回数も増やした。

② 気づきの質を高める手立て

ア 環境づくり

季節ごとの自然物や写真、図鑑等を教室に設置し、自然への興味関心を高める。

イ 視聴覚

どの児童も共通理解ができるように写真などで視覚化することを考えた。

ウ 気づきを広める友達との交流

児童同士の交流が新たな発見や気づきを高めることにつながると考え、交流の場を意図的につくり、教員が価値付けを行った。

エ 振り返りの工夫

「活動→振り返り」の流れに気を付け、無自覚から自覚された気づきにする。

(2) 授業実践

始めは、自然に関心をもつ児童が少なく、遊具で遊ぶことに気持ちが向いていたが、夏の終わりには、キンモクセイの花が咲いていることに目を向け、自然の様子に興味をもった。

夏、秋、冬と同じ公園に通い繰り返し活動することで、「次はこうしたい」という思いや願いが出始め、公園マップやスケッチブックを使用し、お互いの伝えたいことを視覚化したことで、発表での伝え合いも活性化してきた。

また児童の見通し・連続性をもつ手立てにもなったことで、季節の変化に目を向け、気づきを広げていくことができた。

しかし、発見したことや気付いたことを友達同士よりも教員に伝えたい児童が多いため、さらに児童同士で伝え合えるよう意図的に交流する機会を設けるなど工夫が必要である。

### (3) おわりに

年間計画のさらなる検証、より適切な評価の工夫、児童同士で交流ができるしかけや工夫が必要と感じた。繰り返し公園に関わっていくことで、生活科の目標である自立への基礎が培われると実感した。他学年の指導にもつながっていくと考えた。

## 2 協議内容

### (1) 質疑応答・感想

#### ① 年間計画を作成するのに留意した点は。

→平成27年度の指導計画を基に、2年間の整合性を考え、どこに力を入れていくか等学年で話し合った。今年度は、児童の実態から公園にかける時間を大幅に増やすよう計画した。

#### ② 一つの公園を選ぶ際、どのような視点で選んだのか。

→季節の変化を感じて欲しいという願いから秋にはどんな木や木の実があるのかを学校周辺のすべての公園について学年で検討し、各クラスが通う公園を決定した。

#### ③ 子どもの変容を感じられるつばやきなどは具体的にはどのようなものか。

→自然の変化に目を向けるつばやきが多くなった。

#### ④ 児童の学びの場を保証する工夫はあるのか、また地域の方や専門家の協力はあったのか。

→学級文庫に図鑑を置いたり、自然物を教室に飾ったりするなど、振り返りや次への見通しを持ちやすいよう環境を工夫した。また、安全面への配慮から支援員に同行してもらった。

## 3 まとめ

(1) 年間指導計画の見直しは、他教科との関連（横のつながり）と他学年との関連を（縦のつながり）考慮しながら実施していくことが大事である。そのため、該当の学年だけで作成するのではなく、学校全体で考えていくことが必要である。学校の体制が求められている。

(2) 気付きの質を高めるには一人ひとりの認識を高めていくことが大事である。ただ情報を集めるのではなく、児童の主体的な活動の中で、比較、分類、関連付けを重ねていくことで、一つひとつの気付きが関連付けられた気付きへと質的に高まっていく。そのため児童の気付きを高めていくために教員は、単元構成や学習環境の設定、学習指導の工夫が求められている。今まで以上に意図的・計画的・組織的な授業づくりが求められる。

(3) 同じ公園へ繰り返し通い、また自分の木を決めたことで、木に名前を付け、公園へ行く度に様子を見たりするなど、自分との関わりを通して愛着をもつことができたのではないか。

(4) 子どもの交流は、1対1で教員に求めてくる。なぜかという、教員は価値付けをしてくれるからだろう。子どもたち同士の交流を広めていくのなら子どもたち同士で価値付けを行えるようにすることが大事になる。そのために教員は、児童が発した言葉を受けて一人に価値付けをして返すのではなく、全体に返していくことが大事である。

<研究主題> 見つけよう 広げよう 高めよう — 「振り返り伝え合う」活動を通して、意欲と自信を持って学ぶ力を育てる —
--------------------------------------------------------------------

## 1 研究内容

(1) 「振り返り伝え合う」活動を通して、意欲と自信を持って学ぶ力を育てるには、どのような手立てが必要だろうか。

## ① 自然・人に目を向けられる環境作り・学級作りの工夫

教室や廊下に児童が見つけたものを掲示・展示するコーナーを作ったことにより、「自分も秋の宝物を見つけてみたい」「おもしろそうだから自分も作ってみたい」という意欲を持たせることができた。また、教員が掲示コーナーに本、写真、コピー、実物を置いておくと効果的だった。

## ② 気づきを共有化する交流活動の工夫

交流活動に時間をしっかりとかけて行った。前の体験を振り返ることで、無自覚な気づきが自覚的になり、個別の気づきを関連付けて気づきの質を高めていく事ができた。友達から「その遊びいいね。」と認められることが、次の体験への意欲や自信につながった。

## ③ 気づきの質を高めるための教員の働きかけ

それまで自分たちが楽しむ遊びを考えていたのが、「幼稚園生が笑顔になってくれるお店を作ろう」という言葉かけをすることで、相手意識を持って遊びを作るという発想の転換につながった。振り返りカードの中から教員が思いをひろっていくことが大切ということが分かった。

## (2) 課題

① 振り返ることで、自らの体験を価値付けることもできたが十分ではなかった。価値付けるためには、教員の働きかけが一層必要になってくる。

② 交流活動に時間をかけると、単元全体の時数が増えてしまう。他の教科との関連をはかりながら、年間計画を立てていく必要がある。

③ 友達からアドバイスされたことが次の体験活動に活かされてないこともあった。アドバイスを次の活動につなげているかどうかを教員が見取り、支援する必要がある。

④ 交流活動の中で、うまく自分の思いが表現できない児童もいる。体験の中のつぶやきや体験後の振り返りカードの中から、教員が思いをひろい伝えていく必要がある。つぶやきをメモしたり、振り返りカードに目を通し、思いをひろっておいたりすることが、時間的に余裕がなくできないこともあり課題である。

## 2 協議内容

(1) どのようにしたらこんなに自然物を集めたり、児童の書く力をつけたりすることができるのか。

→自然が少ない地域なので始めは教員が近くの森や林で自然物を集めていた。そんな中で児童が近くの公園で少しずつ見つけてくるようになった。書く力は、2学期から毎日宿題で3行日記をした。「何をした。だからこう思った。」という形式をこちらで継続して指導することで、

だんだん書く力がついてきた。

- (2) 1年生は字がまだ書けなく言葉で考えている事の全てを表現する事は難しいので担任の見取りが難しい。児童の描いた絵や、身体表現、つぶやいた言葉など、教員が児童と一緒に触れ合って見取ることが大切である。

### 3 まとめ

- (1) 意図的なしかけや児童の発言を教員が待つ等、児童の「やりたい」を実現できる教室環境がある。学習指導要領にある「強い願いや思いをもつ子をはぐくむ」という事ができている。
- (2) 多数決はとらず、児童が意見を出していく交流の様子があった。教員が児童の言葉を深く理解し寄り添う姿勢と、児童が相手を思う姿勢が見られた。
- (3) 表現をやったから交流につながったのではなくて、体験がありき。「体験→表現→体験→表現」表現活動でよいアドバイスをもらっても、次の体験に生かしてない児童がいるが、「それはそれでいいのではないか」という教員が広い見方をできるか。児童が、体験の場で判断することが第一。
- (4) 生活科は点数で評価しないので①充実感②達成感③自己有能感④一体感の、4つがたくさん味わえる教科。

### 4 協議の柱に即した協議[気づきの質を高めるための工夫]

- (1) 何かを繰り返す事がとても大切という視点から、年間指導計画の作成について
  - ・足跡カリキュラム: やったことを残して行って、次の学年に伝えていくことが大事なのでは。
- (2) 「自分の〇〇」: 「自分の木」「自分のアサガオ」というように、本物に出会う事が気づきの質の高まりにつながる。児童が自分でめあてを立て、そこに対する振り返りをする。教員が言葉を教えてあげたり、価値付けしたり、関わったりしていく。そのためには、教員側がどういう児童を育てたいのか。これがしっかりしてないと、的確に働きかけができない。
- (3) 交流活動をする時は、交流することに必要感をもたせる。そのために教員は、児童の思いや願いを聞く。児童に無理のない時間配分ができるよう、計画をしっかりと立てる必要がある。

### 5 まとめ

- (1) 児童一人ひとりの思いや願いをととても丁寧に扱っていた。友達同士で思いを伝え合うことで、新しい発見や楽しさが見いだされていた。
- (2) 四季を感じることは、諸感覚が磨かれる。比べたり繰り返したりする中で、遊びの面白さや自然の不思議さに気付くことができる。
- (3) 「主体的・対話的で深い学び」が、新学習指導要領に書かれている。話したり、書いたりすることで全てを表現することが難しい低学年だからこそ、一人ひとりの気づきを視覚化したり、一人ひとりの表現を教員が読み取ったりすることが必要。
- (4) 今回の学習指導要領改訂では、これまで以上に低学年の学習の充実が求められている。心と体を一体的に働かせて学ぶ低学年の特性から、幼児期における遊びを通した総合的な具体的な学びを生かし、具体的な活動や体験を通して感性を豊かに働かせるとともに、身近な出来事から気づきを得て考えることが行われるなど、中学年以降の学習の素地を形成していくことが重要である。